



給食だより

令和 5 年 12 月 遍照連島小規模保育園



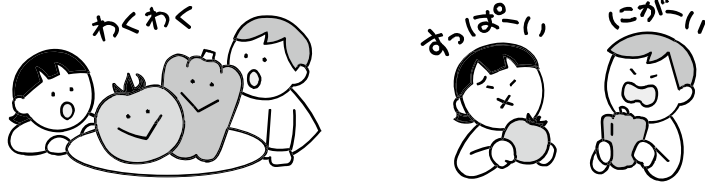
子どもの「食」の悩み

幼児期は、自我の芽生えもあり、食の悩みが多く表れる時期です。「偏食」「むら食い」「遊び食べ」「食べるのに時間がかかる」などは、ほとんどの子どもに起こることです。子どもの心身の発達を理解した上で、あまり無理をせず、ゆったりとした気持ちで向き合うことが大切です。今回は子どもの食行動から支援のコツを探ります。

★よくある悩み

■好き嫌いが多い

子どもは本能で味を選び好みしています。生命維持に不可欠なエネルギーを含む甘味、アミノ酸を含むうま味は誰もが好みます。その一方で、酸味は腐敗の味、苦味は毒の味を認識されるため子どもは本能的に嫌がります。すべての味を受け入れるためには、乳幼児期から食経験を積み重ねる必要があります。



■同じものしか食べてくれない

人には、自分の知らない新しいものに対して、恐れや不安を感じる心理的傾向（新奇性恐怖）があります。特に低年齢児では、離乳食で食べていたものでも、忘れて怖がる場合があります。子どもが嫌がると、つい遠ざけてしまいがちですが、たとえ食べなくても、見えるところに置くことを心がけましょう。信頼できる大人や友だちの食べる姿を見ることで不安な気持ちがやわらぎ、挑戦する意欲がわきます。

■口から出してしまう

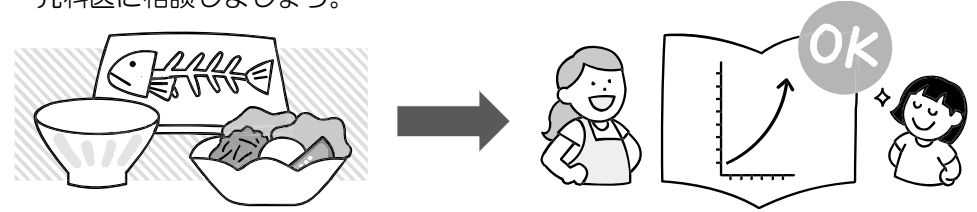
シラスやキャベツのような薄い食材や、弾力がある食材はうまく噛むことができずに口から出してしまうことがあります。また、ネチョツとした食感や特有の風味を嫌がることも…。子どもの発達段階に合わせて、無理なく食べられるように調理しましょう。

■突然に嫌がって食べなくなってしまう

自分で食べられるようになると、「手で食べたい」といった自己主張がでてきます。自分がこうやって食べたいという思いとは異なる食べ方をさせられると「イヤ！」となり、その後も食事が思うように進まなくなってしまうこともあります。そんな時には、一旦食卓から離れることも得策です。子どもの気持ちが落ち着くまでおおらかな気持ちで見守りましょう。

■小食で栄養不足が心配

主食・主菜・副菜を揃えて食べることを心がけましょう。そして、たとえ特定のもの（野菜など）が食べられなかったとしても、「次の食事で摂ろう！」といったように、1日単位で考えて栄養バランスをとりましょう。子どもが成長曲線に沿って成長していることを確認しながら、心配し過ぎることなく食事を楽しみましょう。もしも、気になることがあったら、一人で悩まず、近くの小児科医に相談しましょう。



★食事支援のコツ

■触れる機会を増やす

子どもは、赤ちゃんの時に様々なものを口に入れて舐めて感覚を得たように、食品や料理に対しても、見て、触って、口に入れて、味、風味、食感などを確かめています。子どもが口から出したり、嫌がった時点で「食べない！」と決めつけて遠ざけたりするのは禁物です。たとえ、食べなくても、目にする回数が多ければ多いほど好感度はアップします（単純接触効果）。触れる機会を増やして、抵抗感を減らし、嗜好性を高めましょう。

■食事のリズムをつくる

子どもが小食だったり、食事に時間がかかったりする時には、食事に直接関係があることが気になりがちですが、生活をトータルで見ると悩みの解消につながる場合があります。食事は、毎食おおよそ決まった時間に食べられるように準備し、『体を動かして遊ぶ→トイレ→手洗い→食卓に座る→エプロンをつける』といった流れを大切に、食事は20～30分ぐらいで終わらせると良いでしょう。

■調理の工夫で無理なく食べる



■ちょっとした工夫で食べる意欲を高める

